

# ブラウスとチョコレート



## その一「咳」

---

「あ、あ、ああ。．．． どうしよう。喉が嘎れた。どうしよう。困った。」  
月曜日の朝の部屋でひとりしゃべりながらどれぐらい声が嘎れているのかを確認する。  
「嘎れちゃったー。あーあー。．．． 喉、痛い。」  
月曜だというのに、月始めだというのに、なんてこと。  
カーテンも開けずに薄暗い部屋で春乃はけだるい身体をひきずって台所へ行った。  
もみじが足音を聞きつけてリビングの隅の猫ベッドから起き出してきた。  
うがいをする春乃の足にまるい身体ですり寄って来る。  
「おはよう、もみじ。」と言ったその声の嘎れ具合は寝起きのせいではないようだ。  
ため息が出る。

とにかく着替えて店に行ってしまう。バスに乗ってしまう、仕事してしまう。  
半ばやけっぱちな気分で自分自身に命令する。  
もみじがまんまるの目でこちらを見上げていた。  
毎朝抱き上げてやるのだけれど、今日はダメ。  
今もみじをだっこしたら気持ちが折れてしまってそのままベッドに戻ってしまいそう。

壁にかけられた今日の服。鎖骨が見えるデザインの襟の無い白いブラウスに  
赤茶の膝たけスカート。  
ああ、だめだ、喉が痛いから首を冷やさないものにかえなくちゃ。  
チェストの一番上、「白の段」を開ける。きっちりと三列、たたまれた白いブラウス達。  
一番右の襟ぐりのつまんだものを手にとる。首まわりだけ小さなレースに囲まれている。  
柔らかいアイボリーのシルク混コットンシャツ。  
んなー。もみじがまんまるの声で鳴いたのでご飯をあげて素早く身支度した。  
毎朝の週間通りに果汁100%のオレンジジュースをグラスに一杯飲んだ。  
濃縮還元ではなくちゃんと果物を絞っただけのもの。朝はこれだけ。  
この日ばかりはオレンジの酸味が喉にしみた。ひっかかる異物感を水で飲み下し、  
腰のすっぽり隠れるあたたかな毛糸のカーディガンを羽織って家を出た。

乾いた秋の空気はひんやりと頬に気持ちいい。  
熱、あるのかな。あったら嫌なので考えないことにした。  
バス亭まで歩いて3分、バスに乗って渋谷駅まで20分。  
バスを降りると代官山方面に線路沿いを歩く。  
渋谷の喧噪も和らぐあたり、路地裏の古い雑居ビルに店はある。  
一階はヴィンテージの服や小物を扱う小さな店、二階はさらに小さな事務所だ。  
オーナーと春乃、アルバイトの三人でまわる店「カトレア」いまはアルバイトすら欠員中だ。



鍵を空けて事務所に入るとすぐに電話が鳴った。オーナーの携帯番号。

「おはようございます。」

「おはよう、春乃ちゃん風邪？すごい声ねえ。大丈夫なの？」れい子さんの優しい声。

「はい、なんとか。」優しくされると心細くなる。でも私は大人。大丈夫。

「今日ね、私そっちに行かれないんだけど、バイトの面接お願いね。

具合悪いのにごめんなさいね。3時に女の子が来るから。

それから風邪、辛かったら早めに閉めていいわよ。」

「あ、はい。ありがとうございます。その場合は連絡します。」電話を切った。

これだけしゃべっただけなのにもう喉はがらがらだった。

咳払いをひとつ、した。するとチリチリとした異物感がこみ上げてきて乾いた咳が出た。

咳はひとつでおさまらなかった。

止まらない咳に襲われながら情けなさで苦しさを涙まで出た。

9時から11時、春乃は事務所で在庫管理や伝票整理、発送手続きや梱包作業をする。

12時からは一階の店番だ。

お客はとても少ないので、いつものように静かな昼を過ごした。

うるさかったのは自分の乾いた咳だけだった。

悔しかったので喉の不快感からできるだけ意識をそらした。

ショーウィンドウから入る柔かな秋の日ざし。

時々通り過ぎる足音、遠くで聴こえる自転車のブレーキ。

店のディスプレイを隅から隅まで整え、雑貨とレジを磨き、埃をはらう。

春乃は店を愛している。

アルバイトなんていらぬのにな。

春乃は週5日繰り返されるこの店番の時間がとても好きだ。

午後も2時を過ぎると咳はいよいよ悪化してきた。

舐め続けたレモン味のど飴で胸焼けもしてくる。

ため息とともに外に目をやるとショーウィンドウの向こうに綺麗な女の子が立っていた。

長い髪にたっぴりと細かいウェーブがかかっている、身体にぴったりする黒のカットソーは

胸元が大きく開いている。ショートジーンズに黒のニーハイブーツ。

くっきりとメイクで縁取られた目がこちらに向けられた。

お客様かしら？でもうちの店よりも109に行くのではないかしら？

すると意外にも女の子は店の戸を開けた。

「いらっしゃいませ。」春乃はそんな考えを悟られないように笑顔で言った。

「こんにちは。あの、私アルバイトの面接をお願いしていた須藤です。

3時だったんですけど着いちゃったみたいなんで．．いいですか？」

見た目の派手さによらずしゃべり方は普通だった。感じがいいと言えるくらい。

「あ、はい。どうぞ、大丈夫ですよ。」

彼女は店をぐるりと見渡すようにしてこちらへ歩いてきた。

商品の素朴感と彼女との違和感がすごい。

二人でレジ横のアンティークの応接セットに腰掛ける。

「オーナーから聞いてます。店長の栄田です。よろしくお願いします。」と、名刺を出した。

「鈴原です。よろしくお願いします。えっと．．れい子さんが履歴書はいらなくて言ったので手ぶらできちゃいました。」

小柄な春乃と向かい合って大柄な彼女は少し身をちぢめてお行儀よく足をそろえている。

緊張しているのか膝にのせた手の指をピンと伸ばしている。きちんとした様が好ましかった。

「鈴原．．ナニさん？下のお名前。わたしは春乃です。おんなのこだけの店だから名前呼び合いましょう。」

こういうことを言っても慣れ慣れしいと思われないタイプだと春乃は自分で知っている。

先ほどから彼女を緊張させているのは恐らく自分のかもしだす雰囲気のためだから。

案の定、彼女は少しホッとした顔をして少し嬉しそうに答えた。

「あ、はい。濡です。え？でも春乃さんって呼んでいいんですか？」

「うん。そうしましょう。いつから来られますか？曜日は？」

濡が帰った後、店にほんのりと甘い香りが残った。

バニラのボディークリーム、かしら？

あら？そういえば咳が止まった。声もなんだかそれほど気にならなかったような。

店の真ん中に突っ立ってそんなことを思った瞬間、げほっと咳が戻ってきた。

ああ、もう。

なんだか身体のだるさも一気に戻ったような気がした。背中まで痛む。

濡ちゃんのおかげで具合がよくなったのかしら？

最後の一個になったのだ餡を口に放り込んで、ハーブティーをいれに二階へあがった。

事務所の壁時計を見ると4時をまわっていた。

滯ちゃんと随分おしゃべりしてたのね、私。

お湯が湧くのを待っていると身体は鉛のようにずっしりと床に沈み始めた。

ごほっ。けほっ。ごほん。

やっぱり今日は早じまいさせてもらおう。

受話器をとって着信履歴からオーナーの携帯番号をプッシュした。

## その2 「彼氏」

---

彼氏ができた。

高校時代のお友達のホームパーティーで知り合った佐藤くん。

「柴田さんって下の名前なんていうんですか？」と聞かれた。

「春乃です。」と答えると「え？じゃあ誕生日は？」と聞かれ、「2月です。」と答えると「冬じゃんっ！」とのけぞられた。

早春に生まれたからです、という解説はこの人にとって無意味だろうな、と思い、春乃は佐藤くんと一緒に笑った。

彼の笑顔が可愛くて胸がほんわりした。

佐藤くんはサラリーマンだ。ただしは普通のサラリーマンだ。

億単位のお金は扱わないし、36時間ぶっ通しで働いたりもしないし、30代で西麻布のマンションを所有していたりもしない、普通のサラリーマンだ。

毎週土日がお休みで、金曜日の夜は同僚と一杯やったり、合コンをしたりする。

初めてふたりでお酒を飲んだ夜に彼の家でセックスをした。

春乃は単純に佐藤くんの普通の裸が見てみたかったし、普通な方法で口説かれて普通なセックスを試してみたかった。

佐藤くんはその夜ベッドの中で眠りに落ちるまで春乃を抱きしめて離さなかった。体格のいい彼の腕と胸に挟まれて苦しかったが、体温の高い肌が気持ちよかったのでそのままにしていた。

その次の日の朝から私達は「好きだ好きだ」と言い合い、どこでも手をつなぎ、たくさんセックスをして、たくさん食事をした。

私は佐藤くんの話に出て来る「会社の同僚」「大学の時の仲間」「先輩」「後輩」という単語にときめいては自分も一緒にその世界を生きた。

お日様に干したふとんのようにカラリとして温かくて、春乃は大きなものに護られているような気持ちでした。

佐藤くんの彼女である自分は誰にも嫌われないだろう。彼がそうであるように。

「春乃の部屋に行ってみたい。」と佐藤くんが言った。箱根へのドライブの帰り道だった。

「もちろんいいよ。猫がいるけど大丈夫？」

春乃の部屋に着くと佐藤くんはキョロキョロしながら「オシャレだね。さすが春乃。」

と感嘆の声をあげながらカーテンから置物のひとつひとつまでをくまなく褒めた。

佐藤くんは部屋の中でおおきな熊のように見えた。

もみじは熊にも怯えることなくいつものようにふるまい、

伸びをしてからな——と鳴いた。

ヴィンテージのソファの上、アバクロのトレーナーを着た彼が座っているのを

キッチンから眺めつつ思う。ふたりで彼の部屋に帰りたい。

私は冷蔵庫の中に何種類も常備している高級チョコレートや猫足のチェストの中に

色別各3列にキッチリしまわれたブラウスたちのことを

なぜか決してこの人に言うまいと思った。

その数日後、今度は「春乃の店が見てみたい。」と言った。

「もちろんいいよ。日曜の昼に行く？バイトのコにも会えるよ。」

佐藤くんと付き合ってから、土日はお休みをもらっている。

幸い濡ちゃんが「私は平日休みがいいで〜す。」と言ってくれるので助かっている。

そして約束通りに次の日曜の午後、店を訪ねた。

扉を開けると露出の多い服装で新しく入荷した服たちにタグを着けている濡ちゃんがいた。

「あれえ？春乃さん、こんにちわ〜。」

濡ちゃんはこれからクラブに踊りにいくかのような出で立ちで笑って言った。

「彼にね、ちょっとお店見学を。」

この店に勤めながらも一向に109ファッションを変えない彼女だったが、

きちんと仕事はするし、対応には好感がもてるし、遅刻や無断欠席もしない。

彼女の「きちんとさ」と「派手さ」のバランス感が絶妙で、

春乃は随分と濡を好きになっていた。

「あ、どうも。こんにちは。佐藤です。」彼は私が紹介するよりも早く濡ちゃんの

正面に立って必要以上に大きな声で自己紹介した。

2人が初めて出会った時と同じあの笑顔で。

「初めまして〜。鈴原です。」濡ちゃんは接客モードで挨拶を返した。

「ここが私が働いているお店です。」私は安心した心地で佐藤くんと言った。

「春乃の部屋と似てるね。おしゃれだなあ。」

佐藤くんは私の部屋に来た時と同じ反応でそう言った。



佐藤くんは安心だ。

誰に会わせても、どこに連れて行っても、「この人何をしでかすかしら？」という心配をしなくていい。学級委員長のような彼を表立って悪く思う人はいないからだ。それに春乃は佐藤くんの平凡さや愚鈍さを恥ずかしいと思わない。むしろ逆だ。

誇らしいと言ってもいいかもしれない。

それに加えて、佐藤くんが滯ちゃんのようなスタイル抜群で性的な若い女の子に特別な反応を示さなかったことにこっそりと喜びと満足を感じた。

佐藤くんは平凡だけど下世話ではないのだ。

私達は愛し合っていた。と言っていいと思う。

佐藤くんはいままで付き合ったどんな人とも違った。

泣きながら私を抱いたりしないし、急に行方不明になったり、薬を何種類も飲んだりしない。

不幸な生い立ちでもないし、独身で隠し子もないし、男の子とセックスもしない。

私は疲れきっていた。自分の陰の部分を確認させられてしまう、暗い鏡のような男達との付き合いに。別れに。33歳の自分とその経験という重荷に。

人生にはもっと安全で温かな場所があるはずだと信じ続けることに。

そんな時に佐藤くんに出会ったのだ。

やっと見つけたと思った。ここが長い旅の終着点だと。

彼と手をつないで無邪気に笑うことで自分自身を呪うことから自由になれると。

それなのに私はチョコレートとブラウスのことを隠した。

きっと見せたところで彼は「へえ。」と言って笑うだけだろう。そしてその反応に自分は失望するだろう。それは目に見えていた。

だけど一番問題だったのは私がそれを自然反射的に「秘密」

にしてしまったことのほうだった。

私はいつもブラウスを着ている。ブラウスを集めているし、大切に想う。  
繊細な縫い目や小さなレース、様々な質感の清楚な生地たち。  
プラスチックや貝殻、時に象牙のボタン。  
着るたびに自分を抱きしめてやるような気持ちになる。  
悲しい日のブラウス、嬉しい日のブラウス。  
それから私の冷蔵庫にはまるまる一段を埋め尽くすチョコレートが常備されている。  
ゴディバ、ピエール・マルコリーニ、デメル、アンリ・ルルー、和光. . .  
きっかけはマリファナだった。会うたびにマリファナを吸ってからセックスをする彼がいた。  
セックスの後、マリファナの残り香の中で猛烈にチョコレートが食べたくなったのだった。  
泥酔して裸で眠る彼のいるベッドを抜け出して、夜中にチョコレートを食べるとなぜか  
涙がでた。癒される、と思った。  
それ以来、誰と付き合ってもチョコレートを切らせなくなった。  
私はいままでどの男達にも私の「ブラウスとチョコレート」を隠したことはない。  
私以上にブラウスをうやうやしく扱う男もいたし、チョコレートを一緒に食べながら  
愛撫しあった男もいた。どれも官能的な瞬間だった。

佐藤くんは春乃を大人しくて慎ましい女の子だと思っている。  
「最初に会ったホームパーティの日さ、春乃窓際でひとりボーッとしてたろ？  
退屈してるのかなと思って話しかけたんだ。  
昔から教室でひとりでいるヤツってほっとけなくてさ。」  
いつもの可愛い笑顔でそう言われたのは付き合って半年もすぎた頃だった。  
近所のスーパーで夕飯の買い出しをしていた最中だった。  
「. . . . そう、だっけ？」  
春乃は胸にチクリとするものを感じた。あの日、佐藤くんに話しかけられるまで自分が  
何をしていたかなど覚えてはいなかったが、この時初めて彼のくったくない笑顔に対して  
意地悪な気持ちがわいた。  
「そう。友達がないヤツとか、虐められてるヤツとかさ、声かけて仲間に入れて  
やらないと。」言いながら佐藤くんはタイムセールのシールが貼られた赤い牛肉を  
3パックもかごに投げ入れた。スーパーの安っぽいBGMと彼の声が同化してゆく。  
春乃は突然に疲れを感じた。  
それから冷蔵庫の中にしまっているチョコレートのことを考えた。  
いますぐ一粒口に入れたかった。

### その3 「もみじ」

---

もみじが正確には何歳なのかわからない。  
最初はいつもマンションの入り口横の植え込みにいた。  
誰かが時々こっそり餌をやっていたようだった。  
野良猫のくせに飼い猫のようにどっしとした態度で、香箱座りのすぐ  
鼻先を歩いてもピクリともしなかった。

ある日の晴れた午後に春乃は男の部屋からの帰り道、スーパーへよった。  
前の日の夜は朝まで飲んでいたので頭が朦朧として、スーパーに入ったものの  
何を買いに来たのかわからなくなり、野菜棚の前でぼーとしていた。  
突然に「あ、あの猫に猫缶買っていこう。」などと思い立ち、  
まぐろとずわい蟹の入った人間目線でも美味しそうなものを買った。  
ついでに栄養バランスのいいドライフードも買った。  
なんだかわくわくしたのを覚えている。

マンションにつくと植え込みのところに猫ではなく男がいた。  
「なにしてるの？」春乃はさっきまで一緒に裸でベッドにいたその男にきいた。  
「んー、顔でも見ようかと思ってさ。」長めの髪の間から見上げるような視線。  
さっきまでのわくわくした気持ちは一瞬に消え、鉛のような疲労感がのしかかる。  
明るい日ざしの中で見る彼は随分とみすぼらしかった。  
この人は服をきて太陽の下に出るとてんでダメなんだわ、と冷静に思った。  
何も言わないでつつ立っていると、死神のような顔つきでこちらに寄ってきて  
春乃を抱きしめた。  
「顔見たらまたやりたくなかった。」と掠れ声で言った。  
タバコとお酒が何層にもしみ込んだにおい。深い夜のおい。  
突き飛ばして「帰って。」と言うかわりに痺れのようなあきらめに身をまかせた。  
それでもなお光を求めて植え込みのほうへ視線をやる。猫、猫、どこにいるの？  
そこに緑かかった金色の瞳がふたつ。アカトラの猫は小首をかしげてこちらを見返した。



もみじと暮らして数年、春乃は心の中でもみじを魔法使いだと思っている。

ふわふわでふにふにの魔法だ。

春乃が崖から落ちそうになると、んなーっとまあい声で鳴いて助けてくれる。

それは「ご飯ちょうだい。」「なでてちょうだい。」「ドアを開けてちょうだい。」

という意味なのだが、猫の純粋な要求こそが春乃を覚醒させてくれる。

「泣いている場合じゃないわ、もみじにご飯あげなくちゃ。」

水飴のような甘くて粘着質な憂鬱をひと鳴きでとりはらってくれる。

携帯がヴーーンとうなり続けている。

佐藤くん、佐藤くん、佐藤くん．．．．ありきたりな名字。

着信記録を見ていまさらながらに思った。

このところ彼とあまり会っていない。寂しくないと言えは嘘になる。

会って抱き合ったらまたあの幸せな心地になるかもしれない。

やっぱりこの人を愛してる、と思うかもしれない。

しかし、たくさんの「かもしれない」に勝るのはただひとつの事実。

会わない方が体調がいいのだ。人を愛するのは消耗することではないはずなのに。

いつもなら一緒だった日曜の午後、春乃は床座りでブラウザのボタン付けを

しながら和光のオレンジットをかじっていた。

かたわらで丸くなったもみじは射し込む光を身体いっぱい吸い込んでいる。

ほろがいがオレンジビールとビターチョコレート、やさしいアイボリーの

ブラウザの生地、密閉された安心感と解放された孤独。

「春乃、こっち来て。」佐藤くんは言ったっけ。

「おいでよ、こっち。」ともよく言ったっけ。

私は佐藤くんのほうへ行ったし、佐藤くんの世界に入った。

けれど彼は私の世界に入れないのだ。

入れてあげられないのは彼がそんなものの存在を想像もしないから。

初めて会ったあの日すでに、そう遠くなくやってくる終わりを知っていて

どうして私は彼を愛せたのだろう？

ブラウザもチョコレートも愛せないあの人と一緒にいても

秘密は濃度を増すばかりなのにどうして？

「どうして？」とつぶやいて手を止めた。少し泣いてもいいのかもしれない。

ボタンをつけ終わったブラウザをソファーに横たえ、かたわらのもみじを抱き寄せた。

## その4 「染み」

---

っひ！

声が出たかと思ったがびっくりしただけだった。びっくりだなんて可愛いらしいものでもない。痛いようなショックだ。

呆然として息が止まっている数秒の間にみるみるとそれは広がっていく。

真っ白なブラウスの裾に赤オレンジのしみ。

固まっている私を見て店員が叫ぶように言った。

「す、すみませんっ！ああっ、どうしよう。本当にごめんなさい、いまおしぼりを！」

食器をがちゃがちゃいわせながらキッチンへ駆け込んで行った。

アマトリチャーナ。ブラウスの裾に跳ねた赤い染みを見下ろしながらそのメニューを呪った。

サラダとコーヒー付きで1800円。

少し高価いけれど、今日はどうしても美味しいものを食べたかった。

そして美味しかったのに、こんな結末。どうして今日に限って？

生まれて初めてトマトソースに恐怖した。

店員さんは気の毒なくらいに一生懸命染みをとろうとがんばった。

時々ランチをしに行くレストランだが、見た事の無い学生風の女の子だった。

「いいですよ、もう。あの、私洋服屋なんで店で着替えますから。」

顔がひきつらないよう気をつけて笑った。

だいぶすくなかったものの、白いブラウスにトマトソースは致命的だ。

テレビ通販みたいに激落ち洗剤ってやつでぱぱーっと落としてくれないかな。

レストランを出て人通りの少ない小道に入るとどっと落ち込んだ。

だめ。33歳が染みひとつで泣いたりしちゃだめ。大人なのだから。

アマトリチャーナを注文しなければ、あの店に行かなければ、今日このブラウスを

着なければ、昨日の夜もっと早く寝付いていれば、佐藤くんと別れ話を

しなければ. . . .

後悔のもとをたどっていくとどうしても昨日の夜にたどり着く。

昨日、春乃は佐藤さんと別れた。

佐藤さんは最初、頑として別れ話を受け付けなかった。結婚したいとも言われた。

春乃が態度を変えないでいると、理由を教えてくれと言った。

それから自分はこんなにも春乃によくしてきたのに、どうしてこんな酷い仕打ちをするのかと言われた。「こんなにも好きなのに」ではなく

「こんなにもよくしてきたのに」だ。

理由を言わない春乃に対して自分は被害者であると言わんばかりの態度だった。

仕方がない。この理由を話して理解できるような人なら別れようとは思わなかった。

理由とはブラウスとチョコレートなのだから。

2ヶ月程前、佐藤さんは酔っぱらって春乃の家に押しかけた。

春乃はちょうど遅くに帰宅をした直後で着替えもしないままもみじに餌をあげていた。

深夜のチャイムに怯えながらドアを開けると、顔を真っ赤にした佐藤くんがいた。

「おう。」と言って抱きついてきた。アルコールとにんにくの混じった匂い。

「どうしたの？急に。終電逃した？具合悪い？」

ぐったりと重い佐藤くんの身体を押しつけて聞くと、

「なんだよ。会いたいから来ちゃ行けないの？」と少し不満そうに返してくる。

「いいけど、じゃあ、そこ座って。水持って来るから。」そう言ってキッチンへ行こうと背中を向けたとたん後ろからブラウスのエリをグッと掴まれた。

「いたっ。」私のその声を無視して佐藤くんはキスをしてきた。それから乱暴にソファに押し倒し、馬乗りになる。すごい力だったので、春乃はまるでヘラヘラの紙人形にでもなったように簡単に振り回された。

初めて味わう屈辱感が下腹のあたりにジワリと染みのように滲んだ。

「痛いよ。」もうはっきりと怒って言った。ブラウスがやぶれていないか心配だ。

「俺のこと、好きじゃないの？なんで最近冷たいの？俺なんかした？」

「いま、してるじゃない。痛いって言ってるのに。ブラウスやぶれちゃうよ。」

「ブラウスぐらいなんだよ！」佐藤くんの目の奥が暗く光った。

同時に強い力でブラウスを無理矢理脱がされた。体格のいい彼に対し抗うすべはなかったのでぎらついた彼の顔を見ないようにして、

心の中をキンと冷たくすることで抵抗した。

そしてその間ブラウスの無事だけを祈った。

佐藤くんの体重がかかるたびにブラウスはプチ、と小さな悲鳴をあげた。

糸が切れるたびに春乃の中で同じように切れてゆく何かがあった。

春乃とブラウスをめちゃくちゃにした後、彼はソファでぐうぐうと眠った。

春乃は空っぽの気持ちのままひとりシャワーを浴び、歯をみがき、きちんと肌の手入れをし、最後に痛めつけられたブラウスと猫ベッドでまるくなっていたもみじを抱きかかえてベッドでひとり眠った。眠りは随分と深かった。

次の日の朝目覚めると佐藤くんはいなかった。早朝に自宅に帰ったらしい。もみじと一緒にキッチンに行くと、喰い散らかされたチョコレートの包み紙が散乱していた。

店に戻るとれい子さんがいた。

「あ、おはようございます。」

「おはよう、春乃ちゃん。」れい子さんはたおやかな笑顔でこちらを向いた。すみれ色のヴィンテージワンピースにクロエのブーツを合わせている。

時計はいつものカルティエ。香水はペンハリガンのビオレッタ。

艶やかなれい子さんにいまの惨めな気分を悟られたくなかった。

「お昼いただきました。」わざと高い声で言うつもりが喉にひっかかって裏返ってしまう。

「あら？ブラウスの裾のところ、染みつけちゃったの？どうしましょう。」

お葬式での「御愁傷様です。」と同じ重みでブラウスを悼んでくれるのはれい子さんだからだ。

「あ、そうなんです。店員さんが食器かたすときにはねかしちゃって。

トマトソースって全然とれなくて、今朝寝不足で顔色悪かったのでこの色なら顔映りがましかなって思って着たんです、かなりお気に入りなんですけど、生地が薄すぎてこすれないし、もうなんだか、どうしようかと。」

いけない。最後のほうが涙声になってしまった。

「ねえ、ちょっと上で休んでらっしゃい。ね？着替えは何かここのを使っていいから。」

子供のようにあやされてしまい実に情けない気持ちになったが、同時にすごくありがたかった。



上で休んでいるとしばらくしてれい子さんが上がってきた。

「お客さん、全然来ないわあ。ハーブティーいれましょ。」  
ちゃんと私が泣きやんだタイミングだった。

一体、この人のこの包容力はどう培われたものなのか。

カモミールティーは本当に薬のように効いた。ギュツとしていた眉間がゆるんでいくのがわかる。大きくため息をひとつついた。

「すみません。昨夜あまり寝なくて。」

「うん。彼と別れたのかな？」れい子さんがあまりに普通に、むしろ明るく言ったので驚いた。

腫れ物にさわる様に聞かれてしまったら本当のことは言えない。

「はい、実はそうでした。」私も笑って言えた。

その瞬間、それがなんてことない出来事に感じた。れい子さんの魔法だ。

「そうなのね。そんな気がしました。お店を見に来た彼よね？ 滯ちゃんが会ったって言ってたわよ。」

「滯ちゃん、彼のこと何か言ってましたか？」

「いい人そうでしたって笑ってた。それから意外だったって。」

こういう会話はテストの答え合わせのようだと春乃は思った。

ドキドキする。自分の出した答えが合っていますようにと期待しながら聞いた。

「意外っていうのはどういう意味なんでしょう？」覚悟を決めて聞く。

「普通すぎて。随分普通の人でショーウィンドウ越しに見た時に春乃ちゃんの連れだとは思わなかったって言ってたわよ。」れい子さんはわざとわさ話をするオバさんのように振る舞った。それから、

「私なんか会わなくて解るわ。その彼、春乃ちゃんのこときっと全然知らないだろうって。あなたのこと、優しくていいこだって思ってたんでしょね。なんだか気の毒ねえ。」真顔でそんな事を言った。

彼のことさえ悼んでいるれい子さん。

答えは合っていた。

私達は笑った。

帰り際にれい子さんが紙袋を渡してくれた。

「これ、どうぞ。ガールズサイズだけど春乃ちゃんなら可愛く着られると思うわよ。」  
受け取って中を覗いた。薄い水色に近いような白のブラウス。アイスブルー。

「ありがとうございます。大切に着ます。」

心から心からそう思ったら、なんだか自分が大切にされていると感じた。

帰りのバスの中で膝に乗せた紙袋に視線を落として突然ハッとした。

あ。そうか。今日、誕生日だったんだ。

れい子さんがブラウスをくれたのは今日染みをつけてしまったブラウスの  
かわりだと思ったけれどそうじゃなかった。

34歳になった私。

今夜はこのブラウスを着て、ジャン・ポール・エヴァンを食べよう。